かながわ

絵・岩田輝夫　文・橋本　周

56
麻生区文化協会会報

稲荷山　常念寺

小田急多摩線栗平駅北口を出ると眼下に田園風景が広がる。地元では亀井谷戸とよばれる坂道を五分程下ると片平川に沿って、寺号－常念寺　山号－稲荷山に辿り着く。寺の前を通って広袴へ向かう道は、武将源義経がこの土地の有力な家来であった亀井六郎などを従えて亀井坂を下り鎌倉へ上がったと言われる古道である。竹林に囲まれた常念寺は浄土真宗本願寺派、本山は京都西本願寺、ご本尊は木造阿弥陀如来立像。浄土真宗の開祖親鸞聖人の弟子の一人である乗然又は成然（常念）が一二〇〇年代に開山したと伝えられ、寺歴は七〇〇年余りと言われる。永禄年間に栗木村のお大尽が金井村の阿弥陀堂を栗木に移して本堂を建て、現在地で約四四〇年を経ており、現住職「釋尊仁」は初代福受法師から十九代目にあたる。

境内には、稲荷が二社あり山号の稲荷山はこれに由来する。本堂正面右手には元禄十年を最古銘とする六体の地蔵仏が並び「いぼとり地蔵」の名で、地域の人々に親しまれている。

文化協会と地域活動を考える

麻生区文化協会副会長　山室　茂樹

文化とは

この稿を書くに当ってまず広辞苑にて文化とは何かを改めて調べてみました。それによりますと「文化とは人間が学習によって社会から習得した生活の仕方の総称。衣食住を初め技術、学問、芸術、宗教など物心両面にわたる生活形成の様式と内容とを含む」とあります。すなわち人間の活動そのものが文化であることになります。その意味で一口に文化活動といってもそれは「意識的文化活動」（主として芸術面）と「無意識的文化活動」に分けられると思います。

麻生区文化協会規約第三条には「本会は麻生区民の文化活動を振興し、地域文化の向上及び交流を図ることを目的とす」とありますので文化協会の役割は「麻生区民の生活レベル、精神レベルの向上に直接的または間接的に力を尽くす」にあると思われます。そのことを念頭に考えてみましても、現在の麻生区文化協会は本当によく努力しており「文化芸術のまち麻生区」に恥じない活動をしていると自負して良いかと思います。

現在行っている活動を更に充実したものとして維持、継続してゆかねばならぬことは勿論で、それだけでも大変なことなのですが、更に何か出来ることはないかと考えた時、人間の文化活動を守る環境の整備、すなわち街の美化、自然の保護等についても文化協会として何らかの提言が出来ないかと思います。街並の様子、それを取り巻く自然環境も立派な文化だからです。

囲碁大会への思い

個人的に関心があるのは文化協会の主催で「麻生区囲碁大会」が開催できないかということです。区内の囲碁愛好家は約二千名と推定され、二箇所位で細々と活動はしていますが横の連携はほとんど無いのです。それが一同に会することになれば一大イベントとなるでしょう。もちろん各グループで予選を行い、勝ち抜いた者だけが集うのです。具体的には現在のアカデミー部に囲碁愛好家を三名程度迎え入れ、計画を具体化させるのです。二年程の準備期間があれば実現できるはずです。またいろいろの分野に声をかけ、文化協会への加入者を増やす努力も大切でしょう。

その場合、新たに加入する団体、または個人が、加入することによって得られるメリットを十分に説明できるかがポイントとなるでしょう。

文化活動上の問題点

さて現在いろいろの文化活動、芸術活動で一番問題となっているのは会員の高齢化の問題でしょう。私の専門の俳句では、私の所属する結社の会員の平均年齢は約八十歳、まさに存亡の危機にあると言えます。似たような団体も多いはずです。若年層の新加入者がほとんど無いからです。一口に言えば古い文化から新しい文化への過渡期にあるということでしょうか。

今の若い方達の多くは電子機器文化人であり、テレビ、スマホ、パソコンを三種の神器として崇めそれ以外には興味を示さない傾向にあるのです。

そうだからといって伝統ある文化を絶やすようなことは絶対に阻止しなければなりません。知恵を絞り、勇気をもって行動を起こし、若者達に興味をもって戴けるように最大限の努力を続けることが緊急の課題であります。

創立三十周年記念事業へ向けて

文化協会は昭和五十九年十一月の創立以来、平成二十六年十一月には創立三十周年を迎えます。そのため平成二十六年の活動を充実した、意義あるものにすべく、文化協会では役員及び専門委員にて式典祝賀会実施委員会、三十周年記念誌編集委員会、特別企画推進委員会の三部を設け、鋭意検討中です。また各部の部長さんにも今年の文化祭の行事には、三十周年を記念した特別企画を盛り込んで戴けるようお願いしているところです。

そのように意義ある年の活動ですので我々が努力するのは当然のこととして、一人でも多くの区民の皆様にご参加いただきご鑑賞いただけるよう、この記念事業を広く区民の皆様にご理解いただくことも大切でありましょう。

私と陶芸

内野　勝雄

長い間、陶芸と関わってきたことで、経験してきた色々なことの中で、人に伝えておきたい自分自身の想いなどを書いてみたいと思います。

陶芸を始めるきっかけは、多摩川で「野焼きで縄文土器を作る」企画に参加したことでした。粘土の「採掘」「乾燥」「粉砕」「ふるいかけ」「水を加えて練る」「粘土を寝かせる」「成形」「乾燥」「焼成」と書いてみれば簡単なことのようですが、やって見るととんでもない労力でした。しかも子供からお年寄りまで百人の参加者との協同作業であり、参加者と作業の厳しさや悩みを共有しながら試行錯誤の連続であり、一ヶ月半は野焼きのこと以外は頭に入らない状態でした。最後の焼成の時は多摩川の川原に三戸分の家を解体した木材を搬入してもらい、それをみんなで薪にして、最初は炙り状態の火力で、次第に火力を上げ、角材を約四時間くべ続けたあと、徐々に火を落とし炙りの状態で冷ましていくという作業でした。急に冷ますと割れてしまうので火を落としていく作業は慎重に行ったものでした。角材を大量にくべ、炎が最高に上がった時、これは凄く圧巻でした。

この野焼きの行事が原点となり、当時一緒に参加していた役員で野焼きの仲間を作り、市内の小学校や子供の国などで子ども達に土器作りの楽しみを伝え、この活動を継承してきたことがもとになり、焼き物を作る仲間が自然と集まって作品を作り、発表するようになりました。

そして、七輪陶芸を見つけてきた仲間があり、こんな焼き物も面白そうだとみんなで手探りでやったものでした。何しろ七輪陶芸では焼成温度の調整が難しく、時間ばかり費やし、我慢しきれずブロアーを使って火力を上げたため、火の粉が高く舞い上がり、警察に通報され、パトカーがお出ましになり、「厳重注意」ということもありました。

そうこうしている中で、思い切って火を焚ける所はないかと探しているとき、福島県の石川町で町興しのイベントで七輪陶芸とミニ窯陶芸の情報を見つけ、早速粘土を調達し、搬送可能なミニ窯を各自のアイデアで作り、三年連続でそのイベントに参加したものでした。そして、何と私たちの仲間で毎回賞を独占したこと、周りに気兼ねなく火を焚き焼き物作りを楽しんだことなどいい思い出の一つです。

火との関わりから、最近は陶芸だけでなく、炭焼きのグループに参加し、冬の間は炎とたわむれています。

土・水・火は生命の原点だと思っています。土を耕し、水を入れ、米を作り、火でご飯を炊き、命を繋いでいます。同じように陶芸も土・水・火を使い作品を作ります。現在、私たちには一度作った陶器の再生は出来ませんが、これから再生可能な陶器が出来るといいなと思っています。

三十周年を迎える 麻生区文化協会を想う

杉本　長治

私が文化協会に関わったのは大先輩の箕輪敏行さんに誘われた二十数年前。麻生区文化協会は創立以来、活動が変化充実し、市内、区内の文化に大きな地位を占めるようになり、三十年を迎えた。現在、菅原敬子会長の下、会員の献身的な活動で成果をあげている。

区民に開かれた協会

「からむし」の創刊号で、委員の中村静子さんは、文化協会について次のように述べている。

今まで協会は芸能関係中心に運営されたこと。設立される文化協会は区民の生活の中の文化を文化としてとらえ、区民に開かれた協会でありたい。区民の文化面を担っている方の交流、区民の多面的な文化要求に応えられる運営がなされなければならない。（一部抜粋）

人、人、人に学ぶ

昭和六十三年四月二十三日、総会があり初めて会の事業に出席。藤田親昌、柏木俊夫、白井金治郎、笠原古畦、金井宏道、渋谷益左右、安喰虎雄さん等々、今までの世界とは違う数え切れない文化人との関わりは、私にとって新鮮な経験となった。特に、藤田先生とは総文連の理事、文化かわさきの編集委員として関わりが多く、様々なことを学んだ。

麻生市民館の誕生

市民館は、本来、社会教育法の第五章の「公民館」により設立されるもので、現在のような大規模な施設ではない。麻生区の心ある文化人は「近代的な市民館を」との署名、募金活動を行い、昭和六十年には現在のような近代的な市民館が造られた。その前提にあるのが、活発な区民の文化活動であった。昭和四十五年には「百合ヶ丘児童合唱団」、五十八年には「麻生フィルハーモニー管弦楽団」、五十九年には「楽友協会」が発足し、活発な活動をしていた。

特色ある文化活動

ある区の文化協会の会報の座談会記事に「北の方の文化協会にアカデミーと言う部があるが・・」と皮肉っぽく書いてあった。新しい文化協会をと、会員は論議を重ねたようである。その結果、役員の選出、部の構成など、他には見られない会となった。

〈雑学教室〉

この名称・活動は、渋谷益左右さん・前川朋子さんの知恵によるものと聞く。

雑学教室に参加する。今の多摩自然遊歩道あたりからよみうりランド方面の自然溢れた道を歩く。「この植物は・・」歩を止めて耳を傾ける。「一休みするか・・」とのリーダーの声で腰を下ろし、みんなで歌を歌う。黒川梨導入の川端俊さんから話を聞く。果樹試験場では、職員から更に専門的な話を聞く。

雑学教室風景

道中の自然、史跡などすべてが学ぶ対象であり、参加者が講師になる。人の絆を深める活動であった。まさに、雑学。

〈野外写生大会〉

参加者は思い思いの場所を決めキャンパスに向かう。指導の美術家協会の先生方が、一人ひとりの絵を見て指導する。終わると集まり、作品の評をする。

先生方の評は様々である。親しい画家に「先生によって評が違うね」と言ったら「画家はいいたいことを言うからね」とニヤッと笑われた。

〈からむし〉

「からむし」は、文化協会の会報としては、充実したものである。担当の見識、努力の賜物であり、総文連の理事会などで誇りを持って配った。

野外写生大会後の講評風景

今は東京に転居された河野まさ子さんは「顧問の小島先生（早稲田大・教授）に指導を受けたい」と、ご自宅を訪問し指導を受け、「からむし」を編集された。その熱意に感動した。

〈七草粥の会〉

新春を彩る区役所広場の「あさお古風七草粥の会」は、麻生区文化協会の行事と言うよりも、麻生区の一大行事との感が深い。

この行事は、文化協会の委員の新年会として、細山の郷土資料館で一月下旬に行われていた。しかし、参加者が少なくなり麻生区長や市民館長、委員の知人なども参加して良いことになる。

参加した区長さんなどから、「文化協会の委員だけの行事にしておくのは惜しい」との声があり、会場を区役所広場に移し、区民対象にすることになった。

古風七草粥を食べる新年会風景

問題はあった。区役所広場では、竈でお粥は作れない。（火を使ってはいけない）やむを得ず市民館の調理室を使う。二つ目の問題は、一月七日に行うこと。それまでは一月末に実施していたのに、一月七日は、お正月が終わりホッとする時。しかも寒い。反対があったが「七日にやることに意味がある」と納得してもらった。

以来、お囃子・合唱・遊び・書き初めと多彩になり、七草粥の会を盛り上げる。今では、お粥も九百食と大量になった。委員の皆さんのご苦労に感謝したい。

〈文化サロン〉

藤田会長はかねがね「文化サロンを作りたい」と言っておられた。会長を退任されるとき、ある集まりで、それを強く言われた。ある委員が「私がやる」と言ったら、会長は「お前に出来るのか・・」と語気鋭く言われたので驚いた。

その後、文化サロンが開かれたが、それは○○講座、△△研究会というような会であり、藤田会長の願っていた自由に集い語り合う会では無かった。問題は自由に集える場所がないことである。

〈夏休み親子教室〉

子どもに文化を伝え、子どもを育てることは大切である。夏休み親子教室は、「お楽しみ玉手箱」という子ども向け事業が好評であったので、千坂隆男さんが中心になり始め、協力者が年々増え、平成二十五年度には、講座数は十八、子どもの参加者数は約三百名。講座は充実の一途を辿っている。会員の熱意に感銘。

夏休み親子教室「子ども五七五」風景

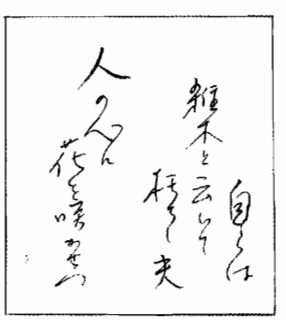
〈アルテリッカ新ゆり美術展〉

芸術のまちづくり、アートセンター建設の委員をやる。川崎市では麻生区を「芸術のまち」と位置づけ、施設建設を構想し「アートセンター構想」となった。しかし、絵画展示等も出来る多目的施設でなく、演劇・映画の専門施設の建設が大勢であった。絵画の展示は新百合21ホールの改造でよい、との考えである。第一回の「アルテリッカ新ゆり美術展」の新百合21ホールに足を踏み入れ、その見事さに仰天し、麻生美術家協会の力の凄さに敬意を表した。

多麻に萌える

「多麻に萌える」は市民館建設運動の成果の冊子である。委員長の藤田親昌さんは巻頭言で次のように述べている。（末尾の部分）

・・・けれども、文化活動は自由でなければなりません。これに携わる人間は、自分を完成させる必要があります。一度、花が咲いた地域文化の見事さも、それに参加する人間の動きによって枯れることもあります。自分だけを押し出すことは止めましょう。地域みんなで腕を組める大切さを、私は言いたいのです。



藤田さんが他界された後、雪子夫人にいただいた宝の色紙

第二十五回 麻生区文化協会俳句大会 十月二十七日

本玉 秀夫

川崎市長賞
初蝉や五百羅漢に千の耳　本玉 秀夫

川崎市議会議長賞
雲の峰若き親子の肩車　関森 田鶴子

川崎市教育委員会賞
花冷えや窯に火入れの祈り酒　岩田 輝夫

麻生区長賞
黙祷は平和の誓ひ終戦日　山室 樹声

麻生市民館長賞
敬老日「ありがとう」だけ言える母　山室 みゆき

川崎市総合文化団体連絡会理事長賞
雲の峰ペタルを強く強くふむ　橋本 周

川崎市観光協会会長賞
二才児の裸の自由見つけたり　馬場 身江子

麻生観光協会会長賞
凍蝶の羽閉ぢ直す百度石　杉本 好子

麻生区文化協会会長賞
翡翠の逢瀬二呼吸ほどに消へ　小原 万津枝

平成二十五年度俳句大会席題句

「気」又は「田」を当季雑詠に詠み込む

千枚田に秋天は紺一枚　佐藤 信次
水底の石の影にも秋気かな　都留 嘉男
だしぬけに群れ立つすすめ刈田道　岡田 正義
巾着田めぐる火攻めの曼珠沙華　大谷 巒水
さりげなく見舞ふ友への野菊かな　早川 靖子
虫しぐれ中に忍者の居る気配　並川 洋
田舎つぺ貌そのままの禅寺丸　野崎 寿子
信濃路や閑の棚田に盆の月　岩田 輝夫
みはるかす棚田彩る草紅葉　山室 樹声
生き甲斐に気力育てる菊作り　久保倉 和美

平成二十五年度俳句講座開催

・八月二十七日
講師　我妻民雄（現代俳句協会会員）
演題　「同時代の作家たちと私」

・九月三日
講師　吉森正人（さざなみ会員）
演題　1「文学に現れる星と宇宙」
　　2「寺田寅彦に見る文理融合人間」

・九月十日
講師　小林和男（NHKラジオ論説員）
演題　「見落としている日本とロシアの関係」

伝統文化の継承 第十一回 あさお古風七草粥の会

加宮 節子

毎年正月七日に麻生区役所広場で行われている七草粥の会も、今年でもう十一回になり、今年の一月七日も晴天に恵まれ盛大に行われました。

この会には、地元に自生する七草を摘んで地元産のお米で七草粥を！という地元の皆様の思いと努力の〝前史〟がありました。

私が、細山地域から分かれた向原地区へ移って来ましたのは、丁度細山資料館で「あさお古風七草粥の会」が始まったばかりの頃で、早速仲間に入れて頂きました。

これが地域の皆様との最初の出会いともいうべきもので以来もう三十年近くになりました。

七草摘みは、細山の和田さんのご指導をいただき、田畑が残っていた黒川の里山では川端さんから土間のある古民家で歓待を受け、吉沢さんには地元米集めでいろいろお世話になりました。

当時、お粥は必ずしも一月七日でなく、文化協会の新年会の日に供されていました。

当日は、資料館の屋外に設けられたかまどでお粥をつくり、さらに細山のお囃子連による「悪魔払い」の獅子舞、そしてお酒も加わり、大いに盛り上がりました。

その後、市民館の調理室のガスをつかいお鍋で九百食ものお粥をつくるようになりました。時代とともにいろいろ事情が変わって来るのは当然のことでしょうが、文化協会の大事な伝承行事として、昔を思い出しながら微力ながらお手伝いをさせていただいております。

第二十九回麻生区文化祭事業 文化講演会を終えて
「ポーランドを巡るいくつかの想い」

昭和音楽大学教授　川染　雅嗣

川崎市麻生区に転居して十年以上が経過したが、その間地域と連携して活動を行ったのは、勤務している昭和音楽大学が行っている学生による地域貢献プログラム「アーツ・イン・コミュニティー」の担当として引率して地域の小学校を訪れたことぐらいである。それがふとした縁から麻生区文化協会の文化サロン部が主催する講演会に出演することになった。

正直困ったことになったというのが最初の感想である。地元に、勤務している大学があり、私が何らかの失敗を犯したならば、その累は大学にまで及ぶと考えると気が重くなる。しかし私も地域住民の一人である以上避けて通れないと思いお引き受けした。

当日は「ワルシャワの成立と芸術～ショパンとその時代～」というタイトルで講演とピアノ演奏を行った。ポーランドは日本人には馴染みの少ない国である。

長く国土を失い、一四九年間に亘って地図上から国名が消えていた。第一次大戦後に国土の回復を図るが、第二次大戦後はソビエト連邦の支配下に置かれ、長く鉄のカーテンの向こう側の国として認識されていた。

音楽の世界ではショパンが生まれた国として、また科学の世界ではコペルニクスやマリー・キュリーの国としてしか知られておらず、どのような文化をもち、どのようなメンタリティーをもった人々が居住する国なのかは不明であった。

一九七八年に初めてポーランドに渡ったが、その時はアンカレッジを経由してハンブルグで乗り換え、ワルシャワまで行ったものであった。今でも日本からワルシャワ行きの直行便は飛んでおらず、渡航者は必ずヨーロッパ内のどこかの空港で乗り換え、そこからワルシャワ入りすることになる。

ポーランドはロシアに接しているが、私が留学していた当時の国民は大のロシア嫌いであった。だから皮肉なジョークが山ほどある。その一部は講演会当日にもご紹介した。一方で親日家が大変多いが、一度だけ「なぜ日本はドイツと組んで戦争したのか」と絡まれたことがある。ともかくお節介なくらい世話好きの人が多く、そのお蔭で随分と助けられた。

この国では音楽だけでなく色々な勉強をさせてもらった。今、音楽家のはしくれとして食べていけるのも、ポーランドのお蔭と言っても過言ではない。社会主義国での生活は不便であったが、大概の事には驚かない胆力もついたように思う。

私は今、郷里の札幌で、北海道ポーランド文化協会の会員として活動している。札幌はポーランド人が多く居住している全国的にも珍しい街である。一方、同じ札幌にロシア音楽の研究団体である日本アレンスキー協会を設立し、その会長も務めている。かつては仲の悪かった両国に跨るような活動をしている。ポーランドで音楽修業をした私が、ロシア音楽の研究団体を主宰しているのも何か妙ではある。

しかし政治的にはいざ知らず、文化的にはお互い友好的であれと願わずにはいられないのは私だけではないだろう。

今回の講座にあたり、森妙子さん、千坂隆男さんはじめ麻生区文化協会の皆様には大変お世話になった。感謝申し上げたい。講演はともかく演奏は不本意な有様だったので、いつかリベンジを図りたいとも思う。最後に貴協会の益々のご発展を祈念してこの文章を締めくくりたい。

会員の活躍

『交響的一撃』

野口　力　著

専門委員の野口力氏がこのほど音楽活動50年を振り返って、ご本を出版されました。『二十一歳でこの世界に入ってからの五十年間は無我夢中の日々でした。オーケストラ・プレイヤーとしてまた教育の現場で精一杯のことをしてきたつもりです。

シンフォニー大好き人間の僕が現場を離れて十数年がたって、現役時代には思い至らなかった歴史というものを強く考えるようになりました。若い打楽器奏者の中に僕の師匠の小森宗太郎先生や日本人指揮者で最初に世界的に活躍された近衛秀麿先生のお名前を知らない人がいることを知ったときに、これでよいのだろうかという疑問を持ったのがきっかけでした。』というまえがきではじまるこの著作には、音楽愛好家ならば伝説の人になりつつある小森宗太郎、尾高尚忠、近衛秀麿、マンフレット・グルリット、岩城宏之、山本直純、武満　徹・・・との思い出、数々の演奏会における指揮者との思い出、打楽器のいろいろ等、興味深いお話が満載で、一気に読ませていただきました。中央アート出版社

（横須賀朝子記）

INTERFOLK in Russia

2013. 11. 7 ~ 11. 15

特別賞（賞状カップ）授与

―麻生童謡をうたう会―

菅原敬子

麻生童謡をうたう会は昨年十一月、ロシアのサンクトペテルブルクにおいて開催された国際民族の歌と舞踊大会にユネスコの招待で参加しました。参加国はフランス・イタリア等十一ヶ国、四十二団体で日本からは私たちの団体だけユネスコ職員の同行で参加。七会場で七回のデモストレーションをし審査されました。日本の「さくらさくら」「ふるさと」「ふじ山」等々、ロシア語で「カチューシャ」「小さいグミの木」等々を合唱し、どの会場でも「ブラボー」「ブラボー」の大喝采を頂きました。

サンクトペテルブルグ・バラ小・中学校では
日本の着物をきた子どもたちによる
日本語のうたや言葉などあたたかい歓迎をうけた

福田市長に報告

編集後記

▼今年文化協会は創立30周年を迎える。そして「からむし」は先輩のつけてくれた道を引き継ぎ無事五六号までできた。

▼最近の異常気象は日本中に被害をもたらした。我が家でも車庫が大雪で壊れるなど今までに考えたこともない出来事だった。

▼文化協会の活動も年々充実し、恒例化している行事も多く、新年の七草粥の会では相変わらず行列ができ、その上会場に置かれた募金箱には今年も五三二一一円の東北災害義援金が集まったのはうれしいことだった。

（関森　記）

麻生区文化協会会報
からむし　第五十六号
平成二十六年三月三十一日発行
発行人　麻生区文化協会
会長　菅原敬子
編　集　麻生区文化協会 広報部
川崎市麻生区万福寺一―五―二
麻生文化センター内
☎　〇四四―九五一―一三〇〇
印　刷　(株)エリアブレイン